

# 特集 ホラー・恐怖

## 『旧怪談』 耳袋より

京極 夏彦/著 メディアファクトリー

江戸時代の旗本・根岸鎮衛が人から聞いた噂や怪奇体験、世相への皮肉をもとに著した隨筆集『耳袋』。この作品に収められたエピソードのうち、おどろおどろしいものを抽出し、怪談小説の大御所、京極夏彦氏が怪談小説として生まれ変わらせました。旧い仮名遣いで書かれた原文が、現代のミステリ小説のように外来語や、Aさん、Bさんといった仮称を使うことで読みやすくアレンジされています。自身の戒名を付ける息子、屋根裏に住む美人女中、母親に化けた猫…読めばきっと、過去と現在、現実と幻想が錯綜する魔訶不思議な世界をのぞき込むことが出来る…かもしれませんね。

## 『きつねのはなし』

森見 登美彦/著 新潮社 新潮文庫

変わったアルバイトを始めてみたいと思った大学3年生の武藤。現在は、以前別のアルバイトで知り合ったナツメという女性の運営する骨董屋「芳蓮堂」で働いている。ある日、ナツメ曰く「特別」だという天城という名の気難い不思議な常連客に呼び出され、妙な生き物の入った籠を傍らにこう切りだされた。「狐の面を探している。」武藤は芳蓮堂の中で狐面を見つけたが、それを発見し、そしてその、ナツメにとって忌まわしい思い出のある品を天城に渡してからというもの、武藤は妙な執着と幻覚に襲われるようになり…(表題作)。他数篇の怪談小説を収めた、幽玄の短編集。

## 『つばさ』

鷲田 旌刀/著 集英社 コバルト文庫

天埜市が誇る名門男子中学校・天門学院中等学校。ここに通う2年生の遣使蝶は、クラスメートの羽栗翼に呼び出された校庭で、彼の変わり果てた姿を発見した。事の真相を探るため、同級生の野村陸と、翼と仲の良かった先輩・南原玄洋と共に、彼が夢中になっていた、学院に伝わる「天門七不思議」に挑む。

この作品に登場する七不思議は彼らの心身に様々な試練を与えていきます。試練を乗り越えた先に何があるのか。イラストにも注目してみてください。(初めて読んだとき、ヒッ！ってなったのはいい思い出です)

今夏の特集は「ホラー・恐怖」でお送りいたします。

俗にいうホラー・怪談小説以外にも、読んでいて恐怖を感じそうな本もチヨイスいたしましたのでこの暑い夏、ぜひお借りになって、ゆっくり涼んでくださいませ…

## 『骨董通りの幽霊省』

アレックス・シラー/著 金原 端人/訳 西本 かおる/訳 竹書房

イギリスの骨董通りに事務所を構える政府機関・幽霊省。幽霊について長年調査し続け、しかしまったく成果の上がっていないこの省に、<経費削減部>のビーストン氏が目を付け、廃止に向けて動き出した。そうならないための唯一の方法は幽霊の存在を証明すること。所属する4人と1匹(ネコ)は、幽霊を捕まえるための手段として、感受性の鋭いであろう子供の力を借りるため募集を行うことに。果たして幽霊を捕まえ、自分たちの居場所を守ることができるのか?…退治するより捕まえるほうが大変だったり、でも時にはっこりしたり。捕まえる方法も書いてあるので、この夏子供たちと一緒に幽霊探しはいかが?

## 『てのひら怪談』 ピーケーワン怪談大賞傑作選 既刊2冊

加門 七海/編 福澤 優三/編 東 雅夫/編 ポプラ社

一作一作が原稿用紙2枚分、わずか800字以内で構成された、文字通りのひらサイズの怪談集です。少ない字数と反比例するように、独特の怪奇世界へ読者を引き込んでいきます。数十秒から数分で読み切れて、不可思議な気分を味わえるというのは、同じく短い音で心情を表現する俳句や短歌等の伝統に通ずるところがあるのではないか?電車で一駅に、あるいは待合室で、お茶でも飲みながらどうぞ。えこいいきるのは気が引けますが、編集部のおすすめは「お化けの学校」これは怖い!(世知辛的な意味で)

## 『蝶の王』

W・ゴールディング/著 平井 正徳/訳 集英社 集英社文庫

大戦の戦火から逃れ、疎開する子供たちを乗せた飛行機が墜落した。落ちた先は大人島。大人たちから隔絶された子供たちは生き延びるために、規則や組織を作り、協力して暮らすことにした。外界の戦乱をよそに、島は楽園のように自然美しく食料も豊富にあり、初め彼らは平和で豊かな生活を謳歌していた。彼らの前に、不可視の恐ろしい「獣」と「蝶の王」が現れるまでは…。この物語で真に恐ろしいのは、後の酸鼻極める惨劇を起こしたのが、他ならぬ戦火から逃れてきたはずの「無垢な子供たち」である事であろう…。